ひとつぶ
ラノベ
#19
キャットウォークにご用心？
著：藍澤たすく
イラスト：かもめ遊羽

秋も深まった涼やかな日曜の昼下がり。

「にゃ～にゃ～」

「あ、お帰りーふーちゃん。今日の収穫は何かな～？」

ベランダの外で鳴いていたトラジマの猫を自室に迎え入れた少女は嬉しそうにその頭を撫でた。そして胸に「ふーちゃん」を抱きかかえると、緑色の首輪を慣れた手つきでそっと外す。

「はい、ご褒美ね」

「にゃー！」

少女が差し出したキャットフードのお皿に早速かぶりつく「ふーちゃん」。

その様子を微笑ましく見守りながら、少女は首輪に付いている親指の爪ほどの小さなビデオカメラをＵＳＢでパソコンに直結する。

「あっ、草馬さんとこ、また夫婦喧嘩してるー。新婚さんなのにしょうがないわね～」

パソコンの画面に映し出されたのは「ふーちゃん」が今日、外で見てきた光景だった。少女――中里素子――はこうして「ふーちゃん」が毎日撮ってくる映像を見るのを趣味にしていた。

本人は曰く「人間観察」らしいのだが……。

「あー、駄菓子屋さんの跡地、やっぱりマンションになるのか～。なんかがっかりだなあ～」

「あー！　生活指導の町屋先生、これＡＫＢのライブ帰りじゃん⁉　なにその判りやすいでっかい紙袋！　これはメモメモ！」

「うわー、これ佐々木と由真じゃない⁉　うっそ、あの二人付き合ってんの⁉　知らなかったわ～。メモメモメモ！」

……「人間観察」……ね……。

「今日もいっぱい新ネタ仕入れられたわ～。ありがとね～、ふーちゃん★」

ひとしきり動画をチェックした素子は満足そうにパソコンの前で伸びをする。

「んにゃ～……」

キャットフードを食べ終わった「ふーちゃん」は大きなあくびをして、幸せそうにベランダのひだまりで仰向けに寝ていた。無防備なことこの上ない。

「あー、でもたまにはこーゆーワイドショー的なことじゃなくて、もっとすごい事件とか起きないかしら？　そうしたらこのあたしがずばっと解決してやるのにな～」

素子は一人そうごちた。

そう、彼女は中学の部活動も「ミステリー探偵部」に所属するほどのミステリー好きなのだ。もっとも部活の内容は、ほぼ毎日部室でお菓子を食べながらだべっていつの間にか終了、といういたって暢気なものだったが……。

「ま、そんな事件都合良く起きるわけないか。……ん？」

ベランダでうにゃうにゃと惰眠を楽しむ「ふーちゃん」の姿に、素子はふと違和感を覚える。彼女は近寄って「ふーちゃん」の前足を手にとった。「ふーちゃん」はうにゃーと大儀そうに

一鳴きする。
「何これ……？　ペンキ？　もしかして……血？」
そう、「ふーちゃん」のふにふにの肉球には乾いた浅黒い血がべったりと貼り付いていたのだ。
《ぎゃー！》
「ふえええええ!?」
突然パソコンのスピーカーから響いた絶叫に素子は腰を抜かさんばかりに驚いた。
慌ててパソコンの前に戻ると、そこには見慣れない廃ビルの中のような薄暗い場所が映っていた。
そう、動画はまだ続いていたのだ。
画面には頭から夥しい血を流した女性が苦悶の表情を浮かべて埃まみれの床に倒れている。その後ろには大きな石を両手で持ったオールバックの怪しい男が立っていた。男は荒い息に肩を上下させながらも、生気のない目で女性を見下ろしている。
そして、男はもう一度血で汚れた石を振り上げ、女性に向かって振り下ろす……。
「！」
あまりの残酷なシーンに素子は思わず目をぎゅっとつぶった。
おそるおそる薄目を開けると、場面はすでに変わっており、男の姿はどこにもなかった。

が。
「きゃあああああ!?」
今度はいきなり血塗れの男性がアップで画面に映り込んだ。
散々殴られたあとのようで、顔は青黒く腫れ上がり、見開かれた右の眼球が眼窩から零れ落ちそうになっている。
《ぼ……ぐぅあ……が……》
男は喉の奥から絞り出すような声を出しながらこちらに向かって血塗れの手を伸ばしてきたが、やがてぴくりとも動かなくなってしまった。
「これって……これって……」
素子はあまりのショックに譫言を呟くように繰り返した。
殺人……現場？　そしてあたしは……目撃者？
え？　え？　一体どうすればいいの？　通報？　でもどう説明すれば？　ふーちゃんは一体どこでこれを？　え？　え？
一向にまとまらない思考が素子の頭をぐるぐると駆けめぐる。
「！」
刹那、素子の目が大きく見開かれた。
あの男だ。

あの男がいる！

ベランダから見下ろせる路地に立っていたのは、確かにあのオールバックの男だった。

男は落ち着かない様子できょろきょろと辺りを見回している。まるで何か大切なもの……逃してはならないものでも探しているようだ。

「やだ……なんで……」

素子は咄嗟にカーテンの陰に隠れ、そっと片目だけを覗かせた。

あたりを窺っていた男がふいに顔を上げた。

目が合いそうになって、素子は慌ててカーテンの陰に隠れる。

おそるおそるもう一度片目をカーテンから覗かせた時には、もう男の姿は影も形もなくなっていた。

（まさか、ふーちゃんを探してた……!?　でもなんで？　こんな小さなカメラ、気づくはずないのに……そもそもふーちゃんみたいな猫なんて山ほどいるのに……）

ピンポーン

玄関の呼び鈴が鳴った。素子は矢も楯もたまらず、走って階下に降りてドアの覗き穴に目をつけた。

（やっぱり！）

呼び鈴を押していたのはあの男だった。

ピンポーン

「すいませーん、宅急便でーす」

「はぁーい。今行きまーす」

1階のリビングから出てきたのは素子の兄の悟だった。

「あれ？　なんだ、素子そこにいるなら出てくれよ。……どした？　そんな青い顔して？」

玄関のドアの前でへたり込む素子を、悟は訝しげに覗き込む。

ピンポーン

「はぁーい、今あけまーす」

「サト兄、あけちゃだめー！　あけちゃだめだよー！」

素子は必死の形相で悟にしがみついた。

殺される。

今ドアを開けたらあたしたち皆殺される！

「なんだよ、変な奴だなあ。熱でもあるんじゃないか？」

だっこちゃん人形のようにしがみつく素子を左腕にくっつけたまま、悟は無造作に玄関のドアを開けた。
そこにはあの男。
そしてその手には。
鈍色に光る拳銃。
「だめーーーーー！！」
素子が絶叫するのと、ぱーんと乾いた破裂音が玄関に響きわたったのはほぼ同時だ。
素子の目の前には撃たれた悟が倒れて……はいなかった。
「ハッピーバースデー素子！」
「へ？」
男が持っていた銃口から出ていたのは、クラッカーから出てくるような紙吹雪と紙リボンの束と「14歳のお誕生日おめでとう！　素子ちゃん！」という垂れ幕だった。
「え？　え？」
「はっはー、びっくりしたろー、素子ー！　こいつは長田だ。うちの高校の演劇部の部長。老け顔だから演劇部では皆から『おっさん』って呼ばれてる」
「おい中里、それは別に今言わなくていいだろうがー！」
まだ状況が把握できない素子は、仲良く肩を組む悟と「あの男」をぽかんと口を開けて見つ

めている。
「おまえがいっつも『あーあ、身近で殺人事件とか起こんないかなー。そうしたらあたしがズバッと解決してやるのにー』とかよく言ってたから、今年の誕生日プレゼントは絶対これにしてやろうって決めてたんだ。どうだ、すごかったろ？」
「え、でも、サト兄、あの血塗れの女の人はきゃあああああ!?」
「はあーい、素子ちゃん、誕生日おめでとうー！　ふーん、中里くんに全然似てなくて可愛いじゃなーい★」
「似てなくて可愛いは余計だろーが」
「あの男」の後ろから、今度は突然血塗れの女性が現れた。その顔は確かにあの映像に映っていたのと同一人物だった。
「こいつは神川。長田と同じく演劇部の副部長だ」
「え、じゃあ、あれは全部……演技……？」
「そう！　どうだった、あたし達の名演！　本物の殺人事件だと思ったでしょー！　思ったでしょー！」
「ははは、は、は……」
素子は安心したのと緊張したのと嬉しいのと怖いのが綯い交ぜになって、自分でもどうしたらいいのか判らないままその場にへなへなと座りこんでしまった。

「あー……あたし、てっきりサト兄が撃たれたと思って……生きた心地がしなかったよー……」
「うん！　そんだけ騙されてくれれば上等だ。あはははっ」
「くっくっくっ……」
「うふふふ」
悟と長田、神川は愉快そうに笑いあった。
その姿を見て、素子もやっと心の底から安堵した気分になった。びっくりしたけど、自分のためにわざわざこういうサプライズを用意してくれた悟たちの気持ちは純粋に嬉しかった。
「じゃあ、あれですか？　あの血塗れの男の人も演劇部の人なんですか？　あれ、目とか飛び出ててすごかったですよね～。やっぱりあれは特殊メイクとかなんですか？」
「へ？」
素子の問いに今度は一転、悟がぽかんとした顔になった。
「血塗れの男ってなんのことだ？　今回俺が頼んだのは長田と神川だけだけど？」

ピンポーン

その時、玄関のドアの向こうから呼び鈴が鳴った。

「ずい゛……ま゛ぜ……ん……だぎゅ…びん、でず……」
それは喉の奥から絞り出したような、いやにひりついた声だった。

おしまい